

学校だより

豊かな心を育てる 入間野中の読書活動

読書のすすめ 本との対話を楽しむ

子供たちの読書離れが言われ、特に小中高と学年が上がるほど本を読まない割合は高くなり、大人の読書離れも顕著になってきました。昨年度、大学生の読書アンケートによると一日の読書時間がゼロと答えた学生が53%という結果も出ています。かつては、電車の中で文庫本や雑誌に目を通しての人が多かったのに、今やスマホを片手にネットやゲームに夢中になっている姿を見ると、スマホに振り回されているのか、操られているのかと未恐ろしい感を抱くのは、私だけでしょうか。

本校では、豊かな心の育成として図書館教育を推進しています。私が学生の頃の図書室は、校舎の片隅にあり、本の湿気の匂いがする暗いイメージでしたが、本校の図書室は、司書さんや図書ボランティアさんのお陰で、明るく開放的であり、本のディスプレイも魅力的で、おしゃれな本屋さんという雰囲気です。そのためでしょうか、昨年は市内で一番の貸し出し数であり、今年度も着実に貸し出し数が増えています。さらに図書ボランティアさんによる読み聞かせは、生徒たちが楽しみにしており、真剣に聞き入る姿は微笑ましいかぎりです。また朝読書の習慣も本への親しみを助長しています。

読書と学力の関係は、多くの研究や実践で立証されています。言語脳科学の研究からは、読書が脳の働きに影響することは、想像力が鍛えられる。自分の言葉で考える力が身に付く。読んで味わった経験を脳に刻むことができると言われています。自分が実際にしたことのない経験も味わえることも読書の楽しみです。作家の森絵都さんは、本を読むことで内側の友達を作り、読み終えて本を閉じたときに前と違う自分がある、新しい目で世界と向き合えると言っています。また人間が得る情報は、活字よりも音声、音声よりも映像の順です。映像は、一瞬にして情報を多く得ることが出来ますが、そこは受動的であり、深く考える間もなく流れてしまうことがあります。それに対して、活字をよむという行為は、自己の想像力を行使し、自分で考える力が身に付くのです。日本人は、本を「よむ」と言いますが、本に限らず、日本人は、相手を思いやること、「人の心をよむ」「行き先がよめない」とも言います。



その中でも本をよむという行為は、沢山のよいことばをよむことであり、人としての感性を育む最高の行為であり、良い本との出会いはよい人との出会いと同等の価値があると思います。これからも、時にはネット社会の呪縛から離れ、本との対話を楽しむ喜びを少しでも味わえる子供たちを育てていきたいです。